



日本SPF豚協会だより

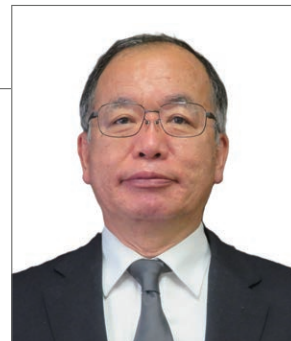
2026.10
No.105

提 言

SPF豚農場認定委員会委員長就任にあたって

一般社団法人日本SPF豚協会 SPF豚農場認定委員会委員長
学校法人麻布獣医学園 理事長
一般社団法人全国肉用牛振興基金協会 専務理事

小倉弘明



赤池洋二名誉会長や急逝された故濱岡隆文前委員長が以前から私の名前を出されていたということで、僭越ながら認定委員会の委員長を引き受けることとなった。自己紹介を兼ねて私と養豚との関係を振り返ってみたい。

私の実家はかつて酪農をやっていて、牛の臨床獣医になろうと大学に入り、学内で唯一乳牛を飼っていた臨床繁殖学研究室に入ったが、指導いただくことになった先生が豚の研究をやるぞと言いつつ出され、自分たちで小さいながらも鉄骨の豚舎を建てて豚を飼い始めたのがはじまりだった。大学には養豚研究会というものもあって、皆さんによく知られている獣医さんの多くはこの頃からご縁がある。卒業研究の対象も豚だったが、牛の臨床への思いは薄れることはなく、就職活動では実家近くの酪農組合に内定をもらっていたが、土産話気分で受けた農林水産省の試験に合格してしまい、田舎にはいつでも帰れるからと言われ国の役人になることになった。採用内定の面接では乳牛の改良に携わりたいと力強く訴えたものの、配属先は動物検疫所で、こんなことならいつか辞めようと思っていたが、皆さんにも大事にされ、門司、成田と異動していくうちに感染症への関心もわいてきた。その後本省に異動、家畜共済の担当を経て1991年に畜産局衛生課(当時)で国内防疫の係長になった。ちょうどオーエスキー病対策でワクチンを使い始めた時で、養豚との深いご縁もこの頃からだ。当時、慢性の呼吸器病があちこちで問題になり(あとでPRRSだとわかったが)、養豚の衛生管理としてオールイン・オールアウトが言われ、その頃だと思いが赤池協会会長(当時)がよく衛生課にお越しになりSPF豚の話聞かせていただいた。SPF豚とオールイン・オールアウトが組み合わさったら確かに・・・と思った記憶がある。その後はオーエスキー病の清浄化対策、国内でのまん延が明らかになったPRRS対策、ワクチン中止を目指

した豚コレラ撲滅対策と続き、2000年の92年ぶりの口蹄疫、豚コレラワクチンの完全中止による撲滅宣言、2010年の口蹄疫の大規模発生と折々経験させてもらった。その後小康状態となっていた動物検疫所の所長時代にはこの状況を誇りに思おうと職員に挨拶をしていたが、農研機構動物衛生研究部門長の時に豚コレラが発生、役人生活最後の1年は本省に戻り豚コレラ改め豚熱対策に携わり大してお役に立たないまま忸怩たる思いでの退職となった。今では全国肉用牛振興基金協会の専務と色々な巡り合わせもあって学校法人麻布獣医学園の理事長を務めさせていただいている。

振り返れば、学生時代、豚を飼ったら豚コレラワクチンを打たなきゃいけないことを知らず、養豚研究会にいた同級生のKから「おまえらに豚を飼う資格はないんだよ!」とえらく叱られた私だったが、SPF豚の関係だけでも赤池先生、柏崎先生、山本孝史先生をはじめ多くの先生方とご縁が出来、頼りにした動物衛生研究部門や都道府県の先生方はもちろん、開業獣医師の皆さんとの付き合いも深まって、去年は大学の理事長の肩書きでアジア養豚獣医学会の大会長まで務めさせていただいた。

これから認定委員会の委員長を務めさせていただくが、役人時代から縁のある先生や各ピラミッドにはSPF豚が何たるかをお聞きしてきた大先輩方もいらっしゃる。SPF豚認定農場については、SPF豚を導入していても飼っている豚はもうSPF豚じゃないんだろ、との話も聞く。基準も作られ良好な衛生環境にはあることが確認されているだけに、その点についてのお話もよく聞けたらと思う。いずれにせよ、かつてSPF豚の作出・普及を試みられた大先輩方の志にも思いを致しながら、これまでのご恩に少しでも報えればという思いで委員長を務めさせていただこうと思う。

SPF豚セミナーは 来年1月27日に 次世代研修会を10月7日に開催 —上半期の事業推進について—

協会では、6月の定時総会で承認された2026年度事業計画に基づき、役員会(会長、ピラミッド理事および事務局で構成、隔月開催)で検討を重ねながら、事業を進めてきました。上半期の推進状況についてご報告いたします。

●セミナーの開催について

SPF豚セミナーは、今年度も年明けの1月下旬に開催することとしました。日時：2027年1月27日(木) 午後、会場：KKRホテル東京を予定して、準備を進めております。会場参加とオンライン参加併用のハイブリット方式とします。懇親会も行います。内容は、恒例のCM農場生産成績年次報告のほかに、講演等のテーマを絞り講師候補を検討中です。一例としては、今最も大きな課題の一つである夏場の暑熱対策について、早期段階から対策を講じる必要性から、専門家による情報提供、現場で役に立つハード・ソフト両面からの取り組み事例の紹介等検討しております。ほかに、AMR(薬剤耐性)対策などの解説なども検討します。詳細については次号の協会だよりやホームページ、メール配信等でご案内いたします。

●農場表彰について

今回で20回目の節目を迎えるCM農場の表彰については、選考委員会を開催、選考基準に基づき、受賞候補農場を選出いたします。所属ピラミッドにより当該農場の農場設備・管理等が表彰にふさわしい高水準にあることを確認し、決定いたします。セミナーにおいて、選考委員長による経過・講評とともに発表、表彰式を執り行い、表彰状およびトロフィーを授与いたします。

また、昨年度初めて行った「選考委員長特別賞」の表彰も引き続き行います。これは昨年12月に急逝された濱岡隆文

前認定委員長の強い思いから設立された賞であり、創意工夫で著しく農場成績をジャンプアップさせた農場や、特徴ある取り組みで成果を上げている農場などを各ピラミッドから推薦してもらい、選考委員会で協議し選出いたします。選考委員会は11月下旬を予定しております。

●次世代研修会・交流会について

協会を支える次世代を育てることを目的として、SPF養豚・協会事業に対する理解を深めてもらうための次世代研修会・交流会を実施しています。4回目となる今年は10月7日(水)に開催いたします。

今回はSPF豚農場認定事業について、実務を担う若手担当者に知識と理解を深め、共通認識をもって認定業務に携わってもらうことを目的とした研修とし、認定規則・細則および認定業務に関する基本的な考え方、実務上の注意点などを解説します。研修後はピラミッドを越えた交流の場も設けます。詳細は次号等でご報告いたします。農場後継者・若手従業員を対象にした研修・交流については、引き続き別の開催の形を検討していくこととしました。

●書面表決を基本とする総会に変更

協会設立から20年にわたり続いた代議員制度を終了して全正会員を構成員とする定時総会(社員総会)に変更いたしました。書面表決による議決権行使を基本とし、5月までに議決権を持つ全正会員に総会議案を送付、6月24日の定時

総会開催までに総会成立の定足数および議案承認のための賛成数を上回る議決権が集まりました。定時総会では全議案が承認されました。正会員の皆さまのご協力に感謝申し上げます。

●認定業務の効率化、 認定データの活用について

クラウドサービス「MOPS」を活用した認定業務が定着、認定委員会における審査もMOPS上で実施しています。認定資料のペーパーレス化、認定作業・認定審査の効率化が進みました。毎回の会議を通して意見を集約しながら、より使い勝手のいいものになるよう、システムの改善を進めています。

また、CM農場の生産成績については、引き続き最新の認定データを含めたベンチマーキングとし、前年度の比較等をわかりやすくまとめたチャート図も追加、従来の農場別年次経過と合わせて農場にフィードバックしています。新たにA薬品費の使い方について、金額だけでなく使用量についても集

計し、参考資料として示すようにしました。

●その他

協会だよりは103号(4月号)、104号(7月号)を発行いたしました。セミナー報告や認定農場年次報告、新任理事の提言、会員農場の直売所紹介など、会員や関係者に対する情報提供の重要なツールとなっております。協会ホームページも随時更新し、情報発信しています。

認定成績におけるA薬品費の使用評価について、現在は金額をもとに上限値を設定し生産成績指数にも反映させておりますが、加えて使用量や投与方法を示してA薬品の適正使用を支援したいと考えています。

また、協会ホームページの運用、協会の将来像および認定制度のあり方、抗生剤を使わない養豚のあり方、成績低迷農場の改善、暑熱対策、ワクチン費用対効果の現状調査等については引き続き検討することとしています。

小倉弘明氏が新認定委員長に就任、学識経験者委員に横山隆氏も

故濱岡隆文氏の後任として第4代SPF豚農場認定委員会委員長に小倉弘明氏が就任されました。小倉先生には今号の「提言」を執筆いただいております。

小倉先生は鳥取県のご出身。麻布大学大学院修士課程獣医学専攻科修了後、農林水産省に入省。本省で国内防疫、疾病清浄化等を担当されたのち、動物検疫所所長、農研機構動物衛生研究部門長(現所長)などを歴任、2019年には大臣官房審議官(消費・安全局)として、26年ぶりに発生した豚熱対策を牽引され、対応に尽力されました。

退官後は麻布獣医学園理事長、一般社団法人全国肉用牛振興基金協会専務理事、一般財団法人生物科学安全研究所評議員、公益社団法人畜産技術協会理事ほか多くの要職をお務めになられています。

協会とのご縁は1992年に日本SPF豚研究会が立ち上げた「SPF豚農場認定基準制定に関する検討委員会」の学識経験者委員としてご協力いただいたことが始まりです。大変お忙しいお立場であるにもかかわらず委員長をご快諾いただけたことに心より感謝申し上げます。

また、あわせて認定委員会学識経験者委員に、元動衛研企画調整部部长・横山隆先生にご就任いただきました。横山先生はプリオン病研究の専門家で国の食品安全委員会の委員をお務めになっておられます。

協会の認定事業をますます確かなものとするため、大所高所からのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

衛生実践学

第4回

基本のキ

豚舎ごとの長靴・衣類交換

東京農工大学
名誉教授

竹原一明

飼養衛生管理基準では、養豚場には豚舎ごとに専用の長靴の設置と利用が定められています。2025年の同基準では、「畜舎ごとの専用の衣服(大臣指定地域に限る。)及び靴を設置し、畜舎に入る者に対し、これらを着実に着用させること。ただし、衣服又は靴が畜舎外において病原体に汚染する可能性がない状況で行う畜舎間の移動については、この限りでない。」(下線は筆者が記入)と記載されています。特に下線部のただし書きでは、豚熱対策として、畜舎外から畜舎内への豚熱ウイルス(CSFV)の侵入を防止する“外部バイオセキュリティ”の強化のためのものと考えられます。ここでは、畜舎間での病原体伝播の抑制は考慮されていません。

さて重要な家畜伝染病に対しては“特定家畜伝染病防疫指針”により、高病原性鳥インフルエンザ・低病原性鳥インフルエンザに加え、口蹄疫、豚熱、アフリカ豚熱に対しても農場単位で全頭殺処分と定められてきました。

しかし、皆さんご承知のように、2026年に家畜伝染病予防法が改正され、「豚熱発生時の選択的殺処分に係る規定」が定められました。ワクチンの利用があるため全頭殺処分をしないことが可能となったのです。この根拠としては、適切なワクチン接種により免疫を獲得した症状のない豚は、殺処分しなくとも感染拡大リスクにならないとの専門家の結論を得たことによります。具体的には、農研機構動物衛生研究部門が実施した感染実験の結果から、症状を示さない豚の体内からウイルス遺伝子のごくわずかに検出される例はあるものの、他の豚にウイルスを伝播するリスクはないことが明らかとなっています。

ところが実際の養豚場においては、ワクチン接種された豚の中に十分な免疫応答をしない豚も含まれ、何らかの形

でCSFVが持ち込まれれば、群の中に潜伏感染を引き起こす恐れがあります。ですから、離乳豚でワクチン接種前や直後の豚では、肥育豚や母豚を飼養している豚舎からの豚舎間伝播を極力抑える必要があります。そのためには、内部バイオセキュリティの強化が必要であり、“豚舎ごとの専用の衣類・長靴の設置”が重要です。

内部バイオセキュリティ強化は、薬剤耐性(AMR)対策にも効果的です。ヨーロッパ連合の養豚の専門家も、AMR対策として一番に内部バイオセキュリティ強化を挙げています。すなわち、豚舎が渡り廊下でつながっていようとまいと、豚舎間での病原体伝播を抑制するため、衣類・長靴交換が大事だということです。養豚場にはCSFV以外にも多数の病原体が存在します。ワクチンで予防できる感染症については、ワクチンの利用は効果的ですが、ワクチンが存在しない、あるいは存在していてもその効果が限定的であるなどの場合には、バイオセキュリティ強化による対策が効果的です。

消毒は、バイオセキュリティの“化学的障壁”です。本連載②でも紹介していますが、逆性石鹼と粒子径が小さい水酸化カルシウムとの混合液による消毒方法“マイクロMIX法”を利用するとともに、豚舎ごとに専用の衣類・長靴交換の“物理的障壁”を強化することで様々な病原体の豚舎間伝播を抑制でき、生産性の向上につながったと言う養豚場があります。ぜひとも農場での豚舎間のバイオセキュリティについて点検をしていただくようお願いします。



きれいに管理された専用履物

TOPICS

全農畜産サービス(株) 東日本原種豚場新豚舎が 完成

全農畜産サービス株式会社
種豚事業部生産部
廣瀬健右

岩手県雫石町に位置する全農畜産サービス(株)東日本原種豚場は、ハイコープSPF生産ピラミッドのGGP農場として、ハイコープSPF純粋種豚の維持・増殖・改良を実施しています。飼養頭数は母豚700頭、AI用雄豚200頭で、年間3,500頭の育成種豚、17万本のAI用精液の販売を行っています。現施設の老朽化に伴い、令和5年に新豚舎の建設を開始し、このたび令和8年7月に竣工しました。新豚舎は日本SPF豚協会のSPF豚農場認定規則に基づいた強固なバイオセキュリティを基盤とし、当社が長年蓄積してきた種豚改良のノウハウをもとに、各ステージに応じた最適な畜舎設計が施されています。その施設と設備の特長を紹介します。

■ 厳格なバイオセキュリティ構造

農場敷地を囲む外周フェンスとSPFエリアを囲む内周フェンスによる2重構造で、部外者や動物の侵入を防いでいます。飼料タンクは場外と場内に2か所設け、場外タンクから場内タンクへは場内専用バルク車で運搬しています。豚の出荷は場内専用車、中継専用車、外部車両の3段階輸送を実施しており、外部車両は衛生管理区域に立ち入れません。人の立ち入りは管理棟からのシャワーインを必須とし、豚舎内で使用する資材は燻蒸消毒を徹底するなど病原体の持ち込み防止に努めています。新豚舎は全豚舎が完全ウィンドレス構造であり、各豚舎および管理事務所は渡り廊下で繋がった一体型構造のため、外部との接触を極力抑えることが可能となりました。

■ 各豚舎の設備の特徴

交配・妊娠舎は、ストール幅を70cmに広げることで母豚の快適性を確保しています。離乳後の母豚の飼養豚房は雄豚房に隣接し、発情再帰や確認がしやすいレイアウトです。分娩・子豚舎は分娩6室、離乳8室で構成され、週単位の「オールイン・オールアウト」を実施しています。分娩ストールは余



裕のある特別仕様であり、ボールフィーダーによる自由採食とバキュームバルブによる給水装置で最大の飼料摂取を促しています。離乳子豚舎では温水暖房と可変式カバーにより、発育ステージに応じた理想的な環境を保ちます。前期育成舎にはビッグパフォーマンステストフィーダーを設置し、個体ごとの飼料効率や発育能力データを収集しています。データは血縁・ゲノム情報と共に全農上士幌種豚育種研究室へ送られ、ゲノム育種価が計算されます。後期育成舎は1頭当たり1.54㎡と十分な飼養面積を確保してストレスを軽減し、独立給餌箱で細やかな体型管理を行っています。空調にはSKOV社の全自動環境管理システムを全豚舎に導入し、季節、発育ステージに応じたきめ細かな管理を実施しています。夏場はクーリングパッドや細霧装置も併用し、暑熱対策を実施しています。細霧装置は暑熱対策だけでなく、舎内の埃の飛散を抑え、呼吸器系疾患の低減も期待できます。



通路の両側にあるのが前期育成舎の各豚房に設置されたテストフィーダー

新豚舎は、高度な防疫体制と最新設備により豚の健康とストレス軽減および作業効率を追求した施設です。当社は今後も高品質な原種豚・精液の安定供給を通じて、日本の養豚産業の発展に貢献してまいります。



協会からのお知らせ

●認定委員会について

3 ページの事業報告でご紹介した通り、小倉弘明氏がSPF豚農場認定委員会委員長に、横山隆氏が学識経験者委員に就任いたしました。認定委員会は認定規則第15条に基づき、

学識経験者委員7名以内、ピラミッド選出委員各1名、協会選出委員2名より構成されています。現在の認定委員会のメンバーは次のとおりです。（順不同：敬称略）

<学識経験者委員>

委員長 小倉 弘明
副委員長 山田 俊治
委員 横山 隆
委員 海老原達之
委員 林 哲
委員 櫻井 忠

<ピラミッド選出委員>

二階堂 聡 全農畜産サービスピラミッド
清水 瞳 サンエスブリーディングピラミッド
上大迫秀作 シムコピラミッド
奥村 利盛 ホクレンピラミッド
小柳理恵子 日本農産工業ピラミッド

<協会選出委員>

小林 一彦
櫻町 恭子

●薬剤耐性（AMR）対策に取り組みましょう

薬剤耐性菌による感染症の世界的な増加が懸念される中、わが国でも国を挙げて薬剤耐性対策を推進しています。毎年11月を「薬剤耐性対策推進月間」に設定し、薬剤耐性に関する知識や理解を深めるための国民的な運動を展開しています。

抗菌剤の適切な使用方法と使用量の低減を心がけましょう！

詳細は農林水産省ホームページ <https://www.maff.go.jp/j/syouan/tikusui/yakuzi/torikumi.html> をご参照ください。

11月は薬剤耐性（AMR）対策推進月間です
～生産者の皆さん、抗菌剤の慎重使用等対策を進め、消費者の皆様へ信頼にこたえましょう！～

薬剤耐性って？
薬剤耐性とは、「抗菌剤が効かない細菌」です。薬剤耐性菌は、抗菌剤の使い過ぎなどにより増加し、人や動物の治療が困難になります。

薬剤耐性問題と畜産との関わりは？
抗菌剤は、畜産分野でも、動物用医薬品や飼料添加物として使用されています。家畜への抗菌剤の使用により増加した薬剤耐性菌が、家畜の治療を困難にするだけでなく、畜産物を介して、人の感染症の治療を困難にすることが懸念されています。

薬剤耐性対策ってどうすればいいの？
→ 次の4つのポイントに取り組んで、抗菌剤の「慎重使用」を徹底することが重要です

- 1 感染症を予防する**
飼養衛生管理水準の向上（施設内の洗浄・消毒の徹底、十分な飼養スペースの確保、適切な栄養管理等）により、感染症を予防しましょう。
- 2 家畜の状態を的確に把握する**
家畜の異変に素早く気付くように、毎日、飼育する家畜の健康観察を行い、家畜の状態を的確に把握しましょう。
- 3 獣医師に伝える**
獣医師が的確に状況を把握し、適切に診断できるよう、発病後の経過、措置の状況、過去の感染症の発生状況等の情報を獣医師に伝えましょう。
- 4 抗菌剤を正しく使用する**
抗菌剤は獣医師からの指示に基づき、用法・用量、使用禁止期間等を守って正しく使用しましょう。

詳細は、農林水産省P（<http://www.maff.go.jp/j/syouan/tikusui/yakuzi/torikumi.html>）に参照しています。 **農林水産省 抗菌剤使用**

豚の飼育者の皆様へ
豚由来MRSAに感染しないよう気をつけましょう

豚由来MRSA（Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*）とは？
MRSAは、動物由来菌として存在する金黄色球菌の一種で、抗菌薬が効果にくく、人への感染のリスクがあります。MRSAはヒト由来と家畜由来のものに区別されます（現在日本の豚肉ではまだヒト由来のMRSAは確認されていません）。

●豚由来MRSAの感染力
MRSAは豚由来菌であり、豚由来菌はヒトへ感染することがあります。豚由来菌はヒトへ感染した場合、ヒト由来菌と区別することが困難です。

●豚由来MRSAに感染しないために
豚由来菌に感染しないためには、豚由来菌に接触しないことが重要です。豚由来菌に接触しないためには、豚由来菌に接触しないことが重要です。

●豚由来MRSAに感染しないために
豚由来菌に感染しないためには、豚由来菌に接触しないことが重要です。豚由来菌に接触しないためには、豚由来菌に接触しないことが重要です。

●豚由来MRSAに感染しないために
豚由来菌に感染しないためには、豚由来菌に接触しないことが重要です。豚由来菌に接触しないためには、豚由来菌に接触しないことが重要です。

農林水産省のホームページより

●日本SPF豚研究会が開催されました

7月17日（金）午後、AP東京八重洲（東京都中央区）において第34回日本SPF豚研究会が開催されました。協会の小林一彦専務理事が2025年度の日本SPF豚協会年次報告を行ったほか、東京大学大学院の花本紗代子氏による農場の抗菌剤使用量の把握および適正化についての取り組みについて

の講演、農研機構動物衛生研究部門北村知也氏の韓国におけるアフリカ豚熱の発生動向についての講演および帯広畜産大学の佐々木貴正氏による養豚と食品媒介感染症との関連性推定に関する講演が行われました。

●故平芳紘氏に顕彰状を、日浅文男氏に感謝状を贈呈

前号でご紹介した通り、永年にわたり協会を支えていただいた(有)芳寿牧場(長崎県南島原市)の故平芳紘氏に顕彰状を、(有)道南アグロ(北海道森町)の日浅文男氏に感謝状を贈呈することとなり、それぞれご自宅を訪問し、お贈りいたしました。

協会が任意団体だった頃の総代はじめ法人以降ずっと代議員をお務めいただき協会を支えていただいた平さんは、昨年11月27日、83歳で急逝されました。ミカン農家だった平さんは一代で母豚1,000頭規模の3サイト農場を築き上げ、認定制度スタート時から途切れることなく認定取得されてきました。こだわりのSPFポークは銘柄豚「芳寿豚」として全国にその名が知れ渡りようになりました。豪快で厳しいながらも優しい人柄で多くの人に慕われた魅力にあふれる方でした。

7月13日、事務局が農場とご自宅を訪問し、ご遺族に顕彰状を贈呈いたしました。ともに苦労を重ね、平さんを支えてこられた奥様の良子さんやご家族、宮井宏泰社長はじめ従業員

の方々に大変喜んでいただきました。

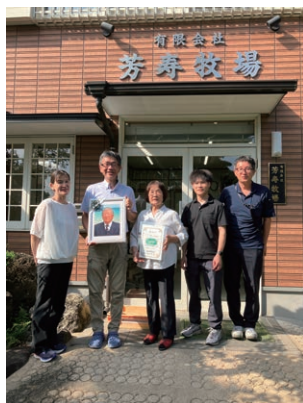
神奈川県出身の日浅さんは獣医師として全農に入会、転勤を繰り返す18年間のサラリーマン生活を経て、SPF養豚に取り組むことを決意、全農を退会して家族そろって北海道に移り住みました。北海道のSPF養豚のパイオニアの一人です。芳寿牧場同様認定制度スタート時からずっと認定を取得、農場を継いだ長男で現社長の順一さんが先頭に立ち銘柄豚「ひこま豚」の直売事業など6次化にも取り組まれています。協会の総代、代議員のほか、生産者理事としても協会を支えていただきました。

8月6日に日浅さんのご自宅のある北海道札幌市に伺い、協会を代表して下山正大理事(有)下山農場、千葉県旭市)より感謝状を贈呈していただきました。

長い間本当にお世話になりました。お二人の永年のご貢献に心より感謝申し上げます。



平良子さんと宮井宏泰芳寿牧場社長。
奥にずらりと並ぶのは認定証



左から次女の野田佳代子
さん、宮井社長、平良子
さん、従業員の石橋孝好
さん、小林洋平さん



日浅文男さん(左)と下山正大協会理事

認定情報

●2026年9月認定農場

(有効期間：2026年9月1日から2027年9月末日まで)

北海道・ササキSPFファーム、(有)山中畜産長沼農場、同千歳農場、(有)高橋畜産、(有)ゲズント農場繁殖センター、同肥育センター、岩手県・(株)ケイアイファーム北上農場、(農)八幡平ファーム、(農)ジョイフルファーム八幡平、(農)八幡平洋野牧場、秋田県・(株)ファームランド、(株)ポークランド第二農場、(株)ノースランド、茨城県・(有)米川養豚場、全農飼料畜産中央研究所実験動物豚舎、栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、長野県・(有)岩垂原エスピーエフ農場、(有)クリーンポーク豊丘農場、(農)エスピーエフこがねや第一農場、千葉県・(有)東海ファーム倉橋本農場、同第2繁殖農場、同猿田農場、同猿田第2農場、

※次回認定委員会は2026年12月10日(木)の予定

同第1肥育農場、同第2肥育農場、(株)ジェネサス、(有)下山農場第1農場、同飯岡農場、岡山県・全農畜産サービス(株)岡山A1センター、広島県・(株)広島ポーク、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産矢下SPF豚繁殖農場、同上馬場SPF豚肥育農場、同矢下SPF豚肥育農場、(株)西日本ジェイエイ畜産名和SPF豚農場、徳島県・(株)七星食品阿波ファーム、同美波ファーム、大分県・(有)九重ファーム、同第2農場、宮崎県・(株)ファームテックえびの農場、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、同阿久根事業所、そお元気ファーム(株)野方農場、同持留農場、同久保崎農場、高山大規模実験農場生産農場、同肥育農場、鹿児島いずみ畜産(株)江内農場、(株)ファームテック大口農場(以上49農場)

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



旨みたっぷり、 簡単おいしいおうちタコス

●レシピ提供・監修／Pokke dish (北海道北斗市)

オーナーシェフ 齊藤亘胤

今回教えていただいたのは、ソースやケチャップ、カレー粉など家庭にある調味料だけでもつくれる特製タコミートのタコス。市販のトルティーヤとお好みの具材を合わせるだけで、手軽に本格タコスを楽しめそうです。ぜひお試しください。

● 材料 ●

豚ひき肉 200g にんにくみじん切り 1片
玉ねぎみじん切り 1/4 個 サラダ油 小さじ 1

<タコミート調味料>

ウスターソース・ケチャップ 各大さじ 1 と 1/2

カレー粉 小さじ 1

塩・こしょう 少々

<トッピング>

トルティーヤ 4～6 枚

レタス千切り 2～3 枚

トマト角切り 1 個

シュレッドチーズ 適量

● つくり方 ●

- ① フライパンに油とにんにくを弱火で熱し、香りが立ったら玉ねぎを中火で炒めます。
- ② ひき肉を加えポロポロになるまで炒め、余分な脂はペーパーで拭き取ります。
- ③ 調味料を加え、弱火で 1～2 分炒め合わせます。
- ④ 温めたトルティーヤにレタス、タコミート、トマト、チーズを乗せて完成。

★齊藤シェフからのアドバイス

ひき肉の余分な脂を拭き取ると、冷めてもすっきりした旨みが引き立ちます。お好みでタバスコをふってどうぞ。

編集 後記

当協会の SPF 豚農場認定事業の牽引車である認定委員長に、小倉弘明氏が就任されました。振り返ると初代委員長波岡茂郎氏は、東海道の特急つばめの C62 形蒸気機関車、二代目の柏崎守氏は人気も高い EF58 形電気機関車、三代目の濱岡隆文氏は華麗にブルトレの先頭に立った EF65 形電気機関車、そしてこの度の小倉先生は北斗星で有名なオールマイティー交直両用 EF81 形電気機関車ででしょうか。養豚業界のみならず人にとっては憧れの先生方ばかり、鉄道ファンにとっても大好きな機関車ばかりです。(宅乱家半角斎)

「あと 10 年もすると AI が人類を滅ぼしかねない」、AI 制作者本人らが手に余すような状況だと言います。映画「2001 年宇宙の旅」での宇宙船の狂った人工知能コンピューターの姿そのものです。これまで、イメージできることは大抵実現されてきたと思うと怖いですね。机の前で PC に向かって人は今や AI がなくては仕事にならず、でもその AI に職を奪われ、アメリカでは AI には務まらない現場の技量を持った人が高収入を得ているようです。ところで、我々養豚業界では AI をすでに立派に使いこなしています。年中お世話になっていますが特に夏は大活躍、アナログで電力も使いません。そうです、あれです。(岩魚)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会の

登録商標です

日本SPF豚協会だより

第 105 号 2026 年 10 月 1 日発行 (季刊)

発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町 1-8-2

TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376

e-mail : j.spf.a@nifty.com

https://www.j-spf.com/

発行人 鷺谷 敏一

編集人 小林 一彦